

よ  
くま  
良  
い  
熊、

わる  
にんげん  
悪  
い  
人  
間

きく  
ち  
菊  
池

かん  
寛

イラスト／池内  
舞



むかし、えちごの国のみようこう山という山さんのふもとに、作右衛門さくえもんという百姓ひやくしやうの一家いっかが住んでいました。この村むらでも一番田いちばん地でんちをたくさん持もっている大百姓おおひやくしやうでした。

十二月じふにがつのすえでした。野のにも山やまにも、雪ゆきがドツサリとつもっていました。その上うへを、冷つめたい北風きたかぜが、たえずこな雪ゆきをふきおくつてきました。作右衛門さくえもんの家いえの人々ひとびとは、みんなカンカンと火ひの起おこった炉ろのほとりにあつまつて、はげしいさむさに、ちぢこまっていました。が、みんなの心こころに、たった一つだけ楽たのしみがありました。それは、お正月しょうがつがもうすぐ来くるということでした。

今年ことし六十五むそごになる作右衛門さくえもんは、若い子わかこや孫まごにも負まけないほど元氣げんきでした。

「さあ、すぐお正月しょうがつが来くるぞ。門松かどまつは、毎年まいとしのように、俺わしが山やまへ行いつて、きり出だ

して来るぞ。」と、作右衛門は元氣そうに言いました。どちらかと言えば、負けん気の作右衛門は、はたから「年がよった」とか「弱くなった」とか言われるのが、大きらいでした。何でも、若い者に負けない氣で先に立ってするのでした。「お父さん、俺も行きましょう。お父さん一人じゃ心配だ！」と、息子の作造が言いますと、作右衛門はかえってふきげんになりました。

「なに、心配のことがあるものか。若い時から行きなれた山じゃ、目をふさいでいても行かれるわ。」と言いながら、皆がとめるのもきかず、のこぎりを一ちよう腰に指したまま出かけて行きました。

外へ出て見ると、風は思ったより、はげしくふいていました。うらの畑の上をとおって、ちんじゆのやしろの横から森にかかりました。

が、森の入口には、大きい松ばかり多くって門松にするような小松は、一本もありませんでした。かれは、元気にまかせて、グングンおくの方へ入って行きました。五町ばかり来ました時に、やっと小松のおいしげった場所へきました。作右衛門は、雪をほりながら、枝ぶりのいい小松を、三本だけきりました。やつと、松をきったので、ホツと安心して、引き返そうとした時でした。ザアツとはげしい音がして、大吹雪がおそってきました。ちょうど立ち上った作右衛門の顔に、砂のようにかたい雪が、バラバラとふきかかってきました。

元気だと言っても六十五の老人です。続いて、バラバラと顔をうつ雪のために、目がくらんでしまいました。船にでも乗っているように、周囲の雪や、雪におおわれた大木が、フラフラと動き出すように思いました。

これは大変だと思つて、作右衛門は、もと来た方へ引き返しました。が、もと来た方だと思つたのは、とんだまちがいで、作右衛門は家の方へ引き返すつもりで、グングン山のおくの方へ歩いたのでした。

だんだん夕ぐれが来てしゆういぐらくりました。ふぶきは、ますますはげしくふきつのでいました。作右衛門は、家へ近づいているつもりで、ますますおくの方へ進んで行きました。その内に、森のおくへ来ますと、そこにヒノキの大木がおい茂っているために、初めて道にまよつたことが分りました。

「サア大変だ。」

と、ごうじょうな作右衛門もおどろきました。が、もう頭がボンヤリして、どちらの方角へ行けば自分の家へ帰れるのか、分らなくなりました。その内に、自分

の足あとを見つけて、それをたどって帰ることに気がつきましたが、その時には、もう日がとつぷりとくれて、どこに足あとがあるのか分らなくなりました。

かれは気がくるったように、左へ一町ばかり行つては立ちどまり、右へ一町ばかり行つては立ちどまり、前へ行つたり、引き返したり、いろいろあせつてみましたが、あせればあせるほど、だんだん森のおくの方へ行くようでおしまいは、とうとう根がつきて、そこにある一本の樹へよりかかりました。

その内に、はげしい寒さがだんだん体にこたえてきました。このまま一夜をあかそうなら、ごごえ死になることは、わかりきったことなのです。そう思うと、いつときもじつとしてはいれません。作右衛門は、あるだけの勇気を出して立ちあがると、自分の家の方角だと思ふ方へ、夢中に進んで行きました。が、五

町行つても十町行つても、雪と大木とのほかは、あかり一つ見えません。その内に、体がグタグタに疲れて、足も腰も動かなくなりました。フラフラと歩いてゐる内に、足をすべらして、いわあなの中へおちこみました。あなの中には、不思議に木のえだや草をしいてあつたので少しもけがをしませんでした。が、かれはおきあがる力もありませんでした。ころんだのをさいわいに、そのままグツスリ寝てしまおうと思ひました。かれがそばにあるかれ草を取り上げて、体の上へのせようとした時でした。かれの手は、何だかあたたかいやわらかい物にさわりました。「やあ！熊だ！」と、すぐ思ひました。が、つかれきつてゐる作右衛門には、にげる力もありませんでした。くわれても仕方がないと思ひました。が、熊は自分の家へにげて来たお客を、くおうなどという悪い心は少しもな

いようでありました。一度作右衛門の体を、「スウスウ」と鼻をならしながらかぐと、今度はお客のじやまにならないように、あなのおくの方へ行つて、そこでいびきをかきながら寝てしまいました。

作右衛門は、熊の親切によつて、命を助かつて村へ帰つてきました。

一晚中ほうぼうをさがしまわっていた子や孫はとびあがつてよろこびました。すると、作右衛門はすぐ、こんなことを言いました。

「俺は、熊の巢を見つけたぞ。さあ、これからたいじに行くぞ。大きい熊じゃ。十両にはなるぞ。」

作右衛門は、五、六人もの若者に鉄ぼうを持たせて、昨夜の熊の巢へ行きました。



た。皆が、熊の巢をかこんで、「わあーっ」と、大声でおどしました。それとい  
つしよに牡牛よりも大きい熊が、巢の中から、ぬつととび出しました。みな  
おどろいて鉄ぼうをかまえようとしている間に、熊は矢のように早く、作右衛門  
にとびついたかと思うと、その太い前足で、作右衛門の頭をひとうちに、た  
きくだいてしまいました。

作右衛門を殺されて、みんながあわてているすきに熊は、「うおーっ」と、  
うなつたまま山のおくへかけこんでしまいました。

このお話は、はじめは大正九年（一九二〇年）十月に「赤い  
鳥」というざつしに発表されました。今では、『菊池寛全集  
補巻第四』（武蔵野書房）という本の中にのっています。